尽きせぬ執心――『鉄輪』の鬼、『道成寺』の蛇

式町眞紀子

【一】問題の所在 ― 鬼になるのか蛇になるのか

ひとに生まれついておきながら、能では、人間は鬼にも蛇にもなる。この、異形の姿となる契機のひとつとして、執心が挙げられよう。さらに、異形の姿となる（変えられる）際、鬼となるパターン、または蛇となるパターンがあるなど、異形の姿にも幅がある。では、いったい何になる（もしくは、される）かの違いには、異形と転じる原因である「執心」のもとや、さらにその矛先に左右されるのではないかと思われる。そこで、実際に作品を通じて検証するべく、鬼となるパターンとしては『鉄輪』を、また、蛇となるパターンとして『道成寺』を選び、本稿ではこの二曲を中心に論じる。

なお、本稿は、二〇一七年十二月一日、学習院女子大学で開催された公演会『道成寺縁起　絵解きの魅力』で披露された絵解きに続き行われた、筆者によるレクチャー「尽きせぬ執心―『鉄輪』の鬼、『道成寺』の蛇」の発表内容に基づき、加筆訂正したものであることをあらかじめ断っておく。

さて、鬼については、能においては怨霊に関連し、生霊死霊が人間（ひと）のかたちをしているものとするので、夢幻能の形式を取るものが多い。まずは、鬼の定義を確認しておこう。辞書での定義の一例としては、次のようにある。

鬼…死者の霊を一般に〈鬼（き）〉という。亡霊をいう。超人間的作用のうちの忌避すべき観念につらなる。日本の〈おに〉の語源については〈隠（おん）〉の字音の転訛らしく、原義は隠れて見えないもの、常民社会とは異なる世界にあって不断は目に見えないものだろう[一]。

死者の霊、すなわち亡霊が「鬼（キ）」であるとし、「見えないもの」として「隠」の字義に由来、それが転訛し「鬼（オニ）」となったとしている。鬼は、同じ漢字を当てられながらも、読み方によって二通りの意味を備えていることになる。

鬼は辞書的にはこのように定義されるが、折口信夫は「鬼と山人と」において、「鬼」の概念とはどのようなものか、宛てられる漢字を出発点に、次のように主張している。

おにと言ふ語は、日本固有の語で、隠でも陰でもなかった。鬼をものと訓じ（此は魔の略格かも知れぬ）、おにと称したのは、語に両面の意があつたからである。おにの第一義は、「死人の魂」で神に近いものと思ふ。其れが段々悪く考へられて安住せぬ死霊のように思はれて行つた。〈中略〉死の国の強力者とも言ふべき、異形身を考へていたであろう。身躰の大きいことが恐らく必須条件であらう。ものは本身を持たぬ魂で、依るべのないものなのである。だから、常に魂のうかれる時を窺うて、人に依らうとするのである[二]。

鬼は日本固有の語であり、「隠でも陰でもなかった」と出発点は異なるものと断りながらも、次のようにも述べている。

もの丶け即、怨霊といふ語は、霊魂を意味するものといふ語と、病気の義なるけといふ語との熟語であった。「霊の病ひ」が直に其を惹き起こす凶悪な霊魂を意味することになる[三]。

元々「もの丶け」と言ふ語は、霊の疾（モノケ）の意味であった。〈略〉低級な精霊が人の身に入ったためおこるわづらひが、霊の疾である。後には霊魂其物をぢかにもの丶けとばかり言ふ様になり、それを人間の霊と考へたのである[四]。

これらのように中国伝来の考え方によれば、出発点は「死者」や「死」そのものであり、目に見えないものが、あたかも見えるような感覚、つまり「おそれ」と「おののき」という、負の想像力がはたらき、ひいては、病気を頂点とし、すべての忌むべきことの原因とみなされ、「もののけ」という熟語になるとの見解である。

一方、現代では、病にとって代わり、妖怪などのように容貌こそ人間ならざるものの、およそかたちあるものを「もののけ」と捉えるのが標準的な解釈になろうが、言い換えれば、みにくさや常とは異なるものに象って対象を固定化しようとするのは、短絡でもあり、想像力が貧困になってきている表われかもしれない。また、漢字の宛て方も、「霊」に、疾病の「疾」が宛てられていることにも注意が必要である。

ちなみに、ワードで変換したところ、物語の「物」に、怪しいという字の「怪」が変換候補の上位で提示され、気持ちの「気」はそれに続く。既に慣用表現としては「物の怪」として認識されている表われであろう。さきほど引いた折口の説明からすると、本来の考え方は、気持ちの「気」を宛てるのが妥当なわけであるが、現代日本語はかように変化しているのである。

なお、活字化されている古文における「妖怪」という熟語の初出は、管見では『太平記』で散見され、一例として、第二十六巻「持明院殿御即位事」にある「かやうの妖怪、触穢になるべくは…」が挙げられる[五]。ただし、この場合の妖怪は、いわゆる今日でいうお化けの類ではなく、天変地異や事件事故などの、不穏なこと、異様な出来事を指すことを見逃すべきではない。

怪しい様子、ただならぬ気配、そして不安――「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」、これは高校古文の教科書でもおなじみの『堤中納言物語』の「虫愛づる姫君」からの引用である[六]。虫などを愛好する生活を続け、上流貴族の姫君としておよそ行動も発言も逸脱し、我が道を行く娘を嘆く両親の言葉のとおり、女性は、つつましやかに御簾のうちにあって姿が見えないように隠れているのが良しとされたものだし、また、一旦見えてしまう時は、人々を恐怖のどん底に陥れる鬼は、やはり見えないにこしたことはないのである。

ただ、「見える」ということ、これは、ひとが「見る」のだろうか。鬼が「見られている」のだろうか。視点をどちらからと定めるかによって、真に恐ろしいものとは何かということが変わってくる。ここに、見えないものが見える時における問題がある。鬼が見えていると感じるのはなぜか。鬼は本当にいるのだろうか。そのことについて、鬼が登場する『鉄輪』を取り上げて考えることにしよう。

【二】能『鉄輪』について
―「まづこのたびは帰るべし」とは本当か

『鉄輪』については作者不詳とされるが、長享二年（一四八八）に演能記録の初見があることから、一五世紀後半には成立していたと考えられる。まずは、あらすじを押さえておく。

夫に見捨てられた女が、恨みを晴らすために貴船明神に参ると、社人が神の告げを聞かせる。赤い着物を着て顔には朱を塗り、鉄輪を頭にいただき、その三つの脚にろうそくを付けて火をともせば、生きながら鬼となって恨みを果たせるというのである（中入）。一方、夫は夢見が悪いので陰陽師の安倍晴明を訪れて祈祷を頼む。晴明が夫と新妻の人形を作って祈祷すると、先妻の生霊が現れる。霊は、人形に向かって恨みを述べ、新妻の髪に手をからめて打ちたたいたりした末、男の命を取ろうと責め寄るが、守護の神々に追われ、のろいの言葉を残して立ち去る[七]。

恨み、呪詛、人形、殺意とおどろおどろしいイメージが連なり、守護の神々に立ちはだかられてもなお、呪いの言葉を残して主人公である女は立ち去るという、あらすじを読むだけでも十分に恐ろしい。しかし、この女は心変わりした夫によって一方的に捨てられてしまっただけであり、冷静に考えてみれば、いわば被害者とも言える。そんな立場から、恨み言を述べて同情はされても、非難されることはあるまい。だが、恨みとは、具体的にはどのようなものか。不実な夫に対するものか、または後妻に対するものか、それともその二人にとどまらず、別の対象に対してだろうか ―― そこで、女の心境をつぶさに綴る詞章に従ってその思いをたどり、恨みの対象とその行先を見ることにしよう。

『鉄輪』前場

〔次第〕　日も数添ひて恋衣　日も数添ひて恋衣　きぶね（着・貴船）の宮に参らん

〔サシ〕　げにや蜘の家に荒れたる駒は繋ぐとも　二道かくるあだ人を　頼まじとこそ思ひしに　人の偽り末知らで　契り初めにし悔しさも　ただわれからの心なり　あまり思ふも苦しさに　貴船の宮に詣でつつ　住むかひもなき同じ世の　中に報ひを見せ給へと

〔下ゲ歌〕　頼みをかけてきぶね（来・貴船）がは　早く歩みを運ばん[八]

シテである女の登場歌である〔次第〕に続く〔サシ〕における、次の詞章に注目したい。「二道かくるあだ人を　頼まじとこそ思ひしに人の偽り末知らで　契り初めにし悔しさも　ただわれからの心なり」――ほかの女に心を移すような人を好きになる道理などおよそ無いはずなのに、しかし、まさに夫がそのような不実な男だとは夢にも思わず、思い続けていたのは、他でもないこの自分自身であると、悔しさが溢れていないだろうか。「ただわれからの心なり」と、「われから」、すなわち自分自身から、ということばには、なんと重みがあることか。そして「あまり思ふも苦し」いという悲痛なうめきにも似た声。これは、単に不実な夫を責めているだけだと言えるだろうか。「人の偽り末知らで契」った愚かな自分が恨めしい。嗚咽し、臓腑から絞り出されるようなこの言葉からは、むしろ、すぐそばにいる人の気持ちを測ることもできないどころか、疑いもしなかった愚鈍な自分を思

い知り、湧き上がる激しい悔悟の情から、自分を責めているように聞こえてこないだろうか。

そうして、まっしぐらに貴船神社へと向かう。貴船の神は、男女の仲を取り持つものとして信仰を集めるが、女は、和泉式部のように夫との復縁を祈願する[九]どころか、この世にあって報いを見せて欲しいとこいねがう。夫への失望と憎しみや、後妻への嫉妬を引き金に激しい自責の念にかられ、自分に対する怒りのエネルギーは、女を鬼に変えてしまったのである。

前場では、シテは異界のものを表す面である「泥眼」をつけるが、恐ろしさの中に、悔しさ・哀しさ・そして静かな怒りを、白目の部分に金を差している工夫からも読み取れる。ちなみに、この「泥眼」という面は、『葵上』での六条御息所の前シテにも用いられる。六条御息所については改めて説明するまでもないが、光源氏との関係が破綻に向かう中、生霊として、死後は死霊として、源氏の周囲の人々をことごとく苦しめたり、死に追いやったりする。御息所の、しかしながらこの光源氏当人を直接攻撃せず、周囲の人々に危害を加えるという点も大きな問題であると思われる。

『鉄輪』の女が「住むかひもなき同じ世の　中(うち)に報ひを見せ給へ」と夫を呪うが、やはり、まずは、後妻から攻撃する。夫を心底怯えさせ、生きた心地がしない思いをさせるという点では、堀を埋められるように周囲の人々に異変が起きる中で狼狽する源氏と『鉄輪』の夫、二人の間に共通するものがある。

後場に移り、鬼の姿となった後ジテの女は「変はらじとこそ思ひしに　などしも捨ては果て給ふらん」と、自分の純愛に対する夫の裏切りを嘆く。

『鉄輪』後場

〔(一セイ)〕　恋の身の　浮かむことなき賀茂川に

〔ノリ地〕　沈みしは水の　青き鬼　われは貴船の川瀬の螢火　頭に戴く　鉄輪の足の　炎の赤き　鬼となつて〈略〉

〔クドキ〕　変はらじとこそ思ひしに　などしも捨ては果て給ふらん　あら恨めしや

〔ノリ地〕　捨てられて　捨てられて　思ふ思ひの　涙に沈み　人を恨み　夫を託(カコ)ち　ある時は恋しく　または恨めしく　起きても寝ても　忘れぬ思ひの　因果は今ぞと　しらゆき(知・白雪)の消えなん

命は今宵ぞ　痛はしや〈略〉

〔中ノリ地〕　…　時節を待つべしや　まづこのたびは帰るべしと言ふ声ばかりは定かに聞こえて姿は　目に見えぬ鬼とぞなりにける　目に見えぬ鬼となりにける

さて、「捨てられて　捨てられて　思ふ思ひの　涙に沈み　人を恨み　夫を託ち　ある時は恋しく　または恨めしく　起きても寝ても　忘れぬ思ひの　因果は今ぞと　しらゆき(知・白雪)の消えなん」と、面々と嘆き悲しむ言葉が連なるが、ひどい仕打ちを受けたにも関わらず、そのくせ「ある時は恋しく」などと、まだ未練がましい。

「起きても寝ても　忘れぬ思ひ」とはいうものの、断ち切れないのではなく、女が断ち切ろうとしないのである。不実な夫を呪っているようで、実は、夫を忘れられない自分が呪わしい、情けないと、自分に対して怒っていると取れる場面である。「そして痛はしや」との切ない声。夫に対しては、恨みを述べつつ、この期に及んでまだ一分の愛情を、そしてそんな迷いを抱き、貴船の神に救いを求めて頼ったも

のの、三十番神一〇に追いやられるのは自分の弱さ。行き場のない思いは果てしない負の循環に陥ること必定となる。

そして「いでいで命をとらん」と、後妻もろとも夫を責め殺そうとして三十番神に立ちはだかられてひるみ、「まづこのたびは帰るべし」と言う女。表面的には負け惜しみに聞こえるが、成仏もできず、中空を鬼としてさ迷い続ける女は、「このたびは」と断る上は、いつまでも自分を呪い、永劫に怒り続けるのであろう。夫に捨てられたかわいそうな女のはずが、怒りが頂点に達し鬼となって、永遠に鬼のままで、救いはない。

これとは対照的に、『葵上』における御息所は、「読誦の声を聞くときは　読誦の声を聞くときは　悪鬼心を和らげ　忍辱慈悲の姿にて菩薩もここに来迎す　成仏得脱の　身となり行くぞありがたき　身となり行くぞありがたき」一二にあるとおり、妄執の火車から解放され、喜びのうちに成仏を果たす。実際には、女三宮の密通を仕掛け、不義の罪が明らかになることを恐れる柏木を悶死させるまでにいたり、女三宮も出家に追い込む場面に、みたびこの世のものならぬ「化け物」として現れるのだが。

しかし、「成仏得脱の身となり行く」との詞章が伝えるように、能では御息所が成仏して終わる。このことは能が書かれた時代の違いによるからとも考えられる。寺社を後ろ盾に発展した能という劇には、ことに夢幻能のシテは成仏を求めて、通りかかる僧職の者の前に然るべくして現れるという設定もほぼ常套的であり、とりもなおさず結末としては有難い経文に与り、成仏するさまを文言とともに可視化する必要があった。だが、一方で、夢幻能の形が少しずつ変化を見せ、必ずしも成仏の有無が明らかではない結末の作品も登場してきたことや、市井の女と上つ方との立場の違いに基づくとも考えられる。『葵上』は、世阿弥の息男元能による芸談である『申楽談義』にも記事が見え、『鉄輪』よりは先にできていたとされる。

繰り返しになるが、「怒り」こそが、鬼となる鍵と考えられる。怒りと鬼の関連性を見るとき、人間の基本的な一〇の罪悪たる「十悪」のうち、意の悪である、九番目の「瞋恚」、すなわち怒り憎むこと、自分の心に違うものに怒りうらむことがクローズアップされる。生まれながらにして背負う原罪ともいえる十種の悪は、その中でもまた、身の悪、口の悪、そして意の悪の三項目に分けられ、それぞれ次のように配当される。

「十悪」
①殺生　②盗み　③邪淫〈以上身の悪〉
④妄語（偽り）　⑤綺語（戯言）　⑥悪口　⑦二枚舌（両舌）
〈以上口の悪〉
⑧貪欲　⑨瞋恚　⑩愚痴〈以上意の悪〉

なお、『鉄輪』という能の素材には、『平家物語』「剣の巻」や、橋姫、そして和泉式部などが指摘されている。前述した和泉式部の歌はそのひとつに当たるが、貴船神社も重要な要素として数えられよう。男女和合にあやかる宮として、そして水との縁として。

「頼みをかけてきぶねがは（来・貴船）　早く歩みを運ばん」

と、女は川を越えることで鬼となる。この「川」というモティーフは、『道成寺』において、白拍子が僧を追いかけるうちに大蛇と化す際にも重要なモティーフになる。

【三】能『道成寺』について
―「望み足りぬと験者たち」は安心してよいのか

それでは『道成寺』に移ることにしよう。鬼はもちろん、キツネやタヌキなどの動物の類や、非人間を登場人物に据えるのは、能よりも狂言で顕著である。しかも、諧謔性や風刺に富み、『道成寺』のように、思い余って焼き殺すなど凄惨な結末につながるようなおどろおどろしさはない。その異例異様さに『道成寺』の特徴があり、問題があるわけだ。また、蛇への転身譚を扱った能はあまり例を見ず、ほかには、レパートリーとしての現行曲ではないが、法華供養に参加したにも関わらず、猟師の生業である狩猟への欲、兄弟への妬みなど、心の迷いから大蛇に変わってしまう『当願暮頭』がある位である。

なぜ鬼畜の姿に変わるのかは、先ほどの『鉄輪』が鬼となったのは、何が主な原因であったかということとも関わってくる。

能の『道成寺』については、『道成寺縁起』の内容に基づくところもあれば、重ならないところもあることはよく知られている。それには、現行の『道成寺』に先行する能『鐘巻』が関係する。差違を考える際には、ひとまず、『道成寺』の詞章を抑えておこう。

『道成寺』前場

〔次第〕　作りし罪も消えぬべし　作りし罪も消えぬべし　鐘の供養に参らん

＊＊＊＊＊＊

嬉しやさらば舞はんとて　あれにましますの宮人の　烏帽子を暫しかり(借・仮)に着て　すでに拍子を進めけり 一二

『鐘巻』は筋立ても詞章もほぼ一致を見せるが、現行の『道成寺』が、右に引いた詞章が示すように、「嬉しやさらば舞はんとて　あれにましますの宮人の　烏帽子を暫しかり(借・仮)に着て　すでに拍子を進めけり」と、鐘入り直前の見せ場である「乱拍子」を一曲の頂点とし、後はそぎ落とすがごとく、いうなれば詞章を省くように簡略化さえしている点や、次に挙げる後場の終曲部に相違を見せる。

『道成寺』後場

〔中ノリ地〕　いづくに大蛇のあるべきぞと　祈り祈られかつぱと転(まろ)ぶが　また起き上がつてたちまちに　鐘に向かつてつく息は　猛火となつてその身を焼く　ひたかの川波深淵に飛んでぞ入りにける

〔歌〕　望み足りぬと験者たちは　わが本坊にぞ帰りける　わが本坊にぞ帰りける

このように、『道成寺』では、大蛇と化した白拍子が川に飛び込んで終わり、それまで慌てふためいていた道成寺の僧たちは満足して帰途に就く。ところが、『鐘巻』では次のような終曲部なのである。

『鐘巻』

〔中ノリ地〕　鐘に向かつてつく息は　猛火となつて炎にむせべば身を焦がす悲しさに　日高の川波　深淵に帰ると見えつるが　またこの鐘をつくづくと　またこの鐘をつくづくとかへり見　執心は消えてぞ失せにける　執心は消えてうせにけり 一三

こうして並べてみると、前者は一目散に川へと飛び込むありさまが描写されるだけで、期待される終わり方、つまり、成仏が果たして実現したのか否かがあいまいである。しかし、後者では、シテは川に戻ろうとするまさにその時、先ほど自分が業火の炎を浴びせた鐘をつくづくと振り返って見る。そして「執心は消えてうせにけり」と、愚行による畜生への堕罪から一転、成仏を果たすことが言外に示される。『鐘巻』の女には、悔悟の哀しみ、己が愚行を省みる心がそこにある[一四]。

いずれにせよ、『鐘巻』も『道成寺』も、前出『道成寺』前場の冒頭、〈次第〉にあるように、「作りし罪も消えぬべし　作りし罪も消えぬべし　鐘の供養に参らん」で物語が始まる。この「罪」とは何か。それは、女が男を好きになるあまり、相手の立場も意向も無視する形で、一方的に追いかけ、追い詰めることに他ならない。『鉄輪』の女は、破れるものの、夫との結婚は成立していた。一方、縁起でも能でも、およそ『道成寺』ものに登場する女は、市井の男ではなく、信仰と修行に克己勉励するいわば聖なる者を見初め、強引に結婚を迫り、当然のように拒絶され、思い余って蛇となる。『鉄輪』では相手の裏切りを契機に鬼となるが、『道成寺』では相手からの拒絶が契機となり蛇と化す。この蛇については、少々視点を変えて考えてみよう。

蛇は、洋の東西を問わず、その特異な形態や生態から、多義的な意味を持っていて、『旧約聖書』「創世記」では、神の罰を受ける。

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。」[一五]

蛇がイブをそそのかし、知恵の実を食べたという誰もが思い浮かべる有名な描写である。キリスト教における原罪の根本は、そそのかされた人間ではなく、そそのかした蛇である。一方、仏教では、前世の悪行の報いで動物に生まれ変わるとされ、その境涯を畜生道と言い、六道の一つで人間に虐げられ、互いに殺傷しあう苦を受けると言われる。『日本霊異記』の記事[一六]、また、先に引用した「虫愛づる姫君」にも、姫君が、蛇を仕掛けた懸想文を受け取り、それを開いた時に驚き騒いだ侍女をたしなめる発言「生前の親ならむ。な騒ぎそ」がある[一七]。

蛇については、先にキリスト教における原罪の問題に触れたが、日本文化における蛇のイメージと象徴を確認しておこう。ふたたび「虫愛づる姫君」からの引用になるが、興味深い読みを導いた一節がこれである。

「はふはふも君があたりにしたがはむ長き心の限りなき身は」

これに対し、本稿で参照したテキストの注にはこうある。「くねくねと這いずり回りながらも、あなたのかたわらにぴったりと付き従おう。この身体のように長くいつまでも変わらない、あなたを愛しく思う心である私は。」同書校注者の塚原鉄雄氏は続けて、「「はうはう」は蛇の生態であるが、姫君に奉仕する含意がある。「長き心」は含意として、愛情の不変を宣言するとともにそれがまた、姫君を見込んだ強靭な執念をも連想させる。古来、蛇は男性の象徴とされる。」とも指摘する[一八]。

蛇が男性の象徴とされるのは、その独特な姿形にも由来する。古代神話の時代から中世の説話に至るまで、異類婚のモティーフとして、

蛇は重要な役割を担っている。蛇体の長さが、愛情の深さを暗示し、強靭な執念をも連想させるとの、塚原氏の指摘はヴィジュアル面での連想を呼び、非常に興味深い。蛇にいったん狙いを定められたからには、逃れる術はないということである。ほほえましい愛情というより、蛇に譬えた愛情は、邪まなまでに深く、淫靡なイメージが漂う。まさに「邪淫」ということばがピッタリ当てはまるだろう。愛しさのあまり歯止めが利かなくなる愛とはいかに。

能から下って長唄にも『道成寺』の悲劇は恰好の素材を提供しているが、長唄解説集である二代目稀音家義丸氏の芸語では、物語の舞台となる地名の特異さにも注目され、「まなご」に、「愛子」を当てる説があること紹介されている[一九]。地名のみを表すのではなく、父親にとって、目の中に入れても痛くないほど愛する子、とも読むことができる。その娘は、しかしやがて、愛する勢いのあまり、悲劇を招く。愛するにも程があるべきで、思いとどまること、冷静になることこそが大事であるとの戒めともとれる。なお、先ほど『鉄輪』で、鬼と化す原動力として「怒り」を指摘し、十悪のうちの「瞋恚」を指摘した。この「邪淫」も、やはり十悪の身の悪に配当されているのは言うまでもない。

【四】まとめ

さて、これまで述べてきた内容を整理し、そろそろまとめに入ることにする。

執心がもとで異形の姿となる（変えられる）際、鬼となるパターン、または蛇となるパターンがあるとし、『鉄輪』では「怒り」、すなわち十悪でいうところの「瞋恚」をそのキーワードとし、『道成寺』では「邪淫」がキーワードとなると述べた。もちろん、一つだけではなく、『道成寺』では「かわいさ余って憎さ百倍」ではないものの、好きの一念で追いかけていた挙句、鐘の中に逃げ込んだ僧を焼き殺すという「殺生」の罪もある。また、後妻の命を奪い、夫の命を狙う『鉄輪』には、同じく身の悪である「殺生」と、夫たる異性に対する執着として『邪淫』も当然関わってくる。ただ、『道成寺』については、殺すことが目的ではなく、あくまでも蛇体と化した勢いで、自分も焼け死ぬという、心中のような結果になってしまったことが、ひとくちに「殺生」と言っても、二曲には違いが生じるのである。このことに関連して、『鐘巻』の終結部が「猛火となつて炎にむせべば　身を焦がす悲しさ」となっていることにも注意が必要だ。ただ好きになった、その一念が相手も自分もまきこむ悲惨な結末となった。その引き金となったのは、あくまでも『邪淫』の念である。畜生道に落とされ、蛇となったのは、邪な肉欲という罪に対する罰ではないだろうか。身を焦がす炎によって、痛みではなく、悲しみが引き起こされるのである。執心の矛先は相手であり、そしてその執心は肉欲に由来する。『道成寺』では、鬼ではなく蛇になるのは、「邪淫」の念によって人間が過ちを犯すことへの戒めと読み取るべきであろう。

そして、『鉄輪』は怒りが根本にあるということで、罰としては畜生の形ではなく、姿形を持たない邪気として「目に見えぬ鬼」とされたと、一応のまとめとしたい。教訓性が前面に打ち出されるわけではないが、能には様々な形で人間に求められる倫理観が組み込まれていることを忘れるべきではない。

最後にもうひとつ、『鉄輪』と『道成寺』に共通する、物語が次の場面に展開する場、つまり『鉄輪』の女が人から鬼になる場面、『道成寺』では女が人から蛇となる場面がどちらも川である点について述

べておく。

先行する『道成寺』関連の説話群では、女が蛇になるのは家屋の中である。『大日本国法華経験記』巻下・第一二九「紀伊国牟婁郡の悪しき女」では、「大きに瞋り、家に還りて隔る舎に入り、籠居して音なかりき。すなわち五尋の大きなる毒蛇の身と成りて、この僧を追ひ行けり。」[二〇]のように「隔る舎に入り、籠居し」とあり、また、『今昔物語集』巻一四・第三「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語」では若干の違いを示しながらも「家ニ返テ寝屋ニ籠居ヌ。」[二一]とやはり室内に閉じこもる描写であり、そして『元亨釈書』第一九・「釈安珍」では「乃入レ室不レ出。経レ宿為レ蛇。長二丈余」[二二]と、いずれも僧が逃げたことを知るや否や、激しく憤り、いったん家に戻って部屋に入り、出てくるときには大蛇と化している点が明らかに異なる。それに対し、『道成寺縁起』で初めて川を渡る時に蛇に変化するのである。これは注目すべきことである。下に、わかりやすいように、『道成寺縁起絵巻』からコラージュしてみたが[二三]、いかがだろうか。この、川を超えると異形のものになるという点については、『鉄輪』でも貴船川を越えることで果たされたと繰り返し述べたとおりである。

川を境に何かが変わるということで視線を西洋に向けると、ウェルギリウスの『アエネーイウス』のアケロンの川を彷彿とさせる。また、大蛇の身を焦がす炎、これは、罰としての火あぶりだけではなく、邪淫の罪の穢れを焼き尽くす浄化の炎と、二重の意味を持っているとも読めなくはないだろうか。川というモティーフ、そして火や炎というモティーフについては、さらに考えを進める必要があるが、今回は、シェイクスピアの『ハムレット』の、暗殺されて亡霊となったハムレットの父のセリフを引用し、いったん締めくくりたい。

「わしは、お前の父親の霊。真夜中だけはさ迷い歩くことが許されるが、昼は間断なく業火の焔に身を包まれて、地上で犯した罪の汚れが焼きつくされ、清められる時を待つ身の上。」二四

【注】

一、中村元編集『岩波仏教辞典』第二版　岩波書店、二〇〇二

二、折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』第17巻、中央公論社、一九九六

三、同「日本の創意―源氏物語を知らぬ人々に寄す―」第15巻

四、同「もの、け其の他」第15巻

五、兵頭裕己校注『太平記　四』岩波文庫、岩波書店、二〇一五　なお、同第二十七巻にも「妖怪」の熟語あり（ただし、流布本の系統によって巻号には異同がある）。

六、塚原鉄雄校注『堤中納言物語』新潮日本古典集成56、新潮社一九八三

七、西野春雄・羽田昶編集委員『新版　能・狂言辞典』平凡社、二〇一一

八、伊藤正義校注『謡曲集　上』新潮日本古典集成57、新潮社、一九八三、以下『鉄輪』詞章は同書に拠る。

九、和泉式部「男に忘れられて侍りける頃、貴船に参りて御手洗川に蛍の飛び侍りけるを見て詠める ― 物思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂（たま）かとぞ見る」参照は、久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』新日本古典文学大系8、岩波書店、一九九四

一〇、本地垂迹説により、日本天台宗と日蓮宗で、法華経を守護する神として、月の三〇日に割り当ててまつる三〇の神。さんじゅうばんじん。

一一、前掲八に所収

一二、伊藤正義校注『謡曲集　中』新潮日本古典集成73、新潮社、一九八六、以下『道成寺』詞章は同書に拠る。

一三、野上記念法政大学能楽研究所創立四十周年記念第四回試演能『鐘巻』パンフレット一九九二年六月九日　於国立能楽堂

一四、『鐘巻』終曲部を『道成寺』と比較し論じたものとしては、拙稿「作りし罪も消えぬべき――女の愛と哀しみの能『鐘巻』」『能楽タイムズ』二〇一八年一月号を参照されたし。

一五、『新共同訳　聖書』「創世記」三章一および一四節、日本聖書協会、一九九〇

一六、『日本霊異記　上』畜生に見ゆと言へども、わが過去の父母なり。六道四生はわが生まれむ家なり。

一七、注六参照。

一八、右同

一九、「「まなご」は地名と愛子の二説あります。紀州の道成寺辺りには現在も真砂という姓の方が多くます。」「紀州道成寺」『長唄囃語』邦楽の友社【非売品】

二〇、井上光貞、大曽根章介校注『往生伝・法華験記』日本思想大系7、岩波書店、一九七四

二一、馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』新編日本古典文学全集、小学館、一九九九

二二、『新訂増補國史大系』第三十一巻「日本高僧伝要文抄　元亨釈書」、吉川弘文館、一九六五

二三、網野善彦、大西廣、佐竹昭広編『瓜と龍蛇』いまは昔むかしは今第一巻、福音館書店、一九八九。原本の道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』をトリミングしたもの。

二四、ウィリアム・シェイクスピア作、安西哲雄訳『ハムレットQ1』光文社古典新訳文庫、光文社、二〇一〇

（本学非常勤講師）